

## 資料紹介 一橋茂栄「老子図並讃」(当館保管)



### ■尾張藩主として藩政に苦勞、『老子』へ傾倒

この作品は、将軍となった慶喜のつぎに一橋徳川家当主となった茂栄(もちなる)が、尾張藩主時代の安政6年(1859)に描いたものである。当時は徳川茂徳(もちなが)といい、前藩主で兄の徳川慶勝が尊王派を重用したのに対し、佐幕派を重んじ、両派の対立の中で苦心の藩運営を強いられていた。

そうしたなかで『老子』に親近感を得たものであろうか。讃は『老子』のなかから7章を撰び、さらに字句を絞り連書したものである。最初の「知る者は言わず、言う者は知らず。其の兌を塞ぎ、其の門を閉じ、其の鋭を挫き、其の紛を解き、其の光を和らげ、其の塵に同ず。是を玄同と謂ふ。(56章)」から、隠居後に「玄同」と称した。なお、最初の「老猫脛膝而蔵怪力」は明治15年に書き加えたものである。

文久3年(1863)には隠居に追い込まれるが、直後に陶製の老子像を造っている。

### ■水戸家の血を引き、松平容保の兄

茂栄は、天保2年(1831)に、尾張徳川家分家高須松平家当主松平義建の3男として生まれた。義建の父義和は水戸徳川家6代徳川治保の3男であり、治保の曾孫にあたる。

兄弟は多いが、とくに兄慶勝(尾張藩主)弟松平容保(会津藩主)、同じく松平定敬(桑名藩主)とともに幕末政治に大きな影響を与え「高須四兄弟」と称された。

嘉永2年(1849)、兄が本家を継いだため、高須藩主となり、ついで「安政の大獄」で兄が隠居させられると、第15代尾張藩主となった。その後、兄が復権すると隠居に追い込まれたが、将軍家茂とともに大坂城で長州征討問題にあたり、家茂から「親とも思う」という絶大な信頼を得るなど、徳川一門のなかでも重要な位置を占めた。

慶応2年(1866)末、将軍となった慶喜の命で、一橋家を相続した。

### ■徳川一門を代表して官軍に歎願、維新後の一橋家を支える

官軍側についた兄慶勝を除くと徳川一門の長老となることから、戊辰戦争にあたって一門を代表して静寛院(和宮)とともに徳川家存続のため歎願の中心となった。

一方、一橋家は慶応4年(1868)5月、田安家とともに独立した「一橋藩」となったが、翌年末の「版籍奉還」では、茂栄は知藩事に任命されず廃藩とされた。当主として家臣のリストラ、新しい事業などに苦心し、明治17年(1884)に死去した。(永井 博)

### ■一橋徳川家記念室展示「一橋茂栄」平成24年11月27日(火)～平成25年1月20日(日)

#### ■関連講演会

「一橋茂栄一激動の幕末維新一」 担当:学芸課長 永井博

日時:平成25年1月13日(日)14:00～15:30 場所:当館講堂